

中国電影大観



中国の植物学者の娘たち(植物学家的中国女孩/LES FILLES DU BOTANISTE CHINOIS/ THE CHINESE BOTANIST'S DAUGHTERS)

2007(平成19)年10月15日鑑賞(東映試写室)

監督・脚本=^{ダイ・シージェ}戴思杰/出演=ミレーヌ・ジャンパノワ/リー・シャオラン/リン・トンファー/ワン・ウェイトン/グエン・ニュー・クイン/グエン・ヴァン・クアン (アステア配給/2005年カナダ、フランス映画/98分)

第8章

トレンディな恋愛から禁じられた関係まで

……『小さな中国のお針子』(02年)に続く叙情あふれる作品は、何と若い女子の同性愛を扱う愛の物語。中国での上映はもちろん撮影すら許可されない中、^{ダイ・シージェ}戴思杰監督が描こうとしたのは「どこにでもある、いつの時代にもある愛の物語」だが、その賛否は分かれそう……？ 美しい山と川そしてそこだけ別世界のような植物園の中で営まれるミンとアンの愛の物語は、新聞記事になるような痛ましい結末に至るのだが……？

^{ダイ・シージェ}戴思杰監督に注目！

^{ダイ・シージェ}戴思杰監督の『小さな中国のお針子』(02年)は、私の心の琴線を揺るがした大好きな映画。そこで『シネマルーム5』では「ヴァイオリン2題」と題して、これも私の大好きな^{チェン・カイコー}陳凱歌監督の『北京ヴァイオリン』(02年)と並べて掲載した(294~309頁参照)。

『小さな中国のお針子』は、中国福建省で1954年に生まれた^{ダイ・シージェ}戴思杰監督の、17歳から3年間四川省の山村に下放された体験を元に映画化されたものだが、その原作となったのは、何とフランスに留学した彼が、フランス在住15年を経た2000年1月にフランス語で書いた小説『バルザックと小さな中国のお針子』。1977年にやっと文化大革命が終焉を迎えた後、彼は四川大学で西洋美術史を学び、1984年には政府給費留学生としてパリに留学したとのことだが、いくらフランス語の発音が中国語と似ている(?)とはいえ、フランス語でこんな美しい小説を発表するとは何ともすごい才能。

ちなみにプレスシートによれば、彼は2003年には小説第二作『フロイトの弟子と旅する長椅子』を発表して、フランス五大文学賞のひとつ〈フェミナ〉賞を受賞したばかりか、2007年1月には『Par une nuit où la lune ne s'est pa levée (月がのぼらなかつた夜に)』を発表しているとのこと。

そんな才能溢れる戴思杰^{ダイ・シージェ}監督が、『小さな中国のお針子』から3年ぶりに監督・脚本を担当したこの映画は、何と若い女の子の同性愛を描いたもの……。私としては、何よりもその衝撃度の強さにビックリ！

禁断の物語を中国は……？

10月15日から第17回共産党大会を開催している中国は「和諧社会」を目指しているが、李和平弁護士^{リヘイ}の拘束などにみられる人権問題と映画などのメディア規制の問題は、私の目からみれば現代の中国が抱えている重大な問題点。

日本国憲法21条が保障する表現の自由や言論・出版の自由は、政治的なテーマに限らず芸術的なテーマも含まれており、また芸術的なテーマの中には性の表現の自由という重大なテーマが存在している。

日本でも、昭和32年3月13日の「チャタレー事件」をめぐる最高裁判例や昭和55年11月28日の「四畳半襖の下張事件」をめぐる最高裁判例、さらに昭和44年9月17日の「黒い雪事件」をめぐる東京高裁判決などにおいて、わいせつと表現の自由をめぐる大論争が展開されてきたことは周知の事実。近時日本では、渡辺淳一原作の『失楽園』(97年)や『愛の流刑地』(06年)の他、団鬼六原作の『花と蛇』(04年)など性愛表現の自由は大きく拡大しているが、中国では若い女の子の同性愛を描く映画などとてもムリ……？

戴思杰^{ダイ・シージェ}監督の『小さな中国のお針子』は何とか中国での撮影が許可されたものの、中国での上映が禁止されたのは中国の芸術面における開放の度合いを考えれば当然。しかして、若い女の子の同性愛を描く禁断の物語は……？

時代設定は……？ 舞台は……？

去る10月7日～11日の北京旅行で中国旅行が11回目となった私は、中国の地理や地名についてかなり詳しくなると自負している。したがって、1976年に起きた唐山地震は、北京から東へ約150キロメートルにある河北省の都市唐山であることはよく

知っていた。この映画の一方の主人公であるリー・ミン（ミレーヌ・ジャンパノワ）は、3歳の時にこの唐山地震によって両親を失い、唐山の児童養護施設で育った少女だから、スクリーン上に登場するミンが20歳だとすれば、この映画の時代設定は1993年……？

他方、この映画の舞台は……？ 植物園のある昆林という都市とのことだが、それはどこにあるの……？ 私は麗江下りの旅に行ったから桂林を知っているし、雲南省旅行によって昆明や麗江もよく知っている。しかし、残念ながら昆林という都市を私は知らなかった。そこで、この評論を書くについて地図やネットを一生懸命調べたが、全然出てこない。そんな中プレスシートを読み返していると、何と「植物園のある昆林と、ハネムーン汽車の行き先、明麗はいずれも架空の街」とのこと。やはり先にプレスシートを読まなくっちゃ……。

昆林はきっと雲南省の都市……？

それにしても昆林とか明麗という地名を見れば、誰だって昆明や麗江そして桂林を連想するし、スクリーン上に登場する美しい川の風景は桂林ツアーで体験した麗江下りを彷彿させるもの。桂林は広西チワン族自治区にあるが、昆明、麗江は雲南省にある美しい都市。したがって戴思杰監督の想定では、きっと植物園のある昆林は、雨が多いため植物の種類が豊富で薬草の宝庫でもある、ベトナム、ラオス、ミャンマーと国境を接する雲南省の都市……？

『サマリア』 vs. 『中国の植物学者の娘たち』

2人の女子高生を主人公にした韓国の天才キム・ギドク監督の問題提起作が『サマリア』（04年）だったが、若い2人の女の子を主人公としたのは『中国の植物学者の娘たち』も同じ。そして『サマリア』は、2人の女子高生の援助交際をテーマとしながら、宗教的色彩が濃く、ドストエフスキーの『罪と罰』のような難しさをもったすごい映画だった（『シネマルーム9』396頁参照）。しかし『中国の植物学者の娘たち』は若い女の子の同性愛がテーマ。

もっともこれは、戴思杰監督の創作ではなく、中国の新聞の三面記事に載っていたという、同じ工場に勤める2人の若い女性が同性愛者で、どちらかの父親の殺害容疑で死刑を宣告されたという事件からヒントを得たらしい。つまり戴思杰監督は、

ベッドで息絶えていた父親が発見された時、同性愛を批判していた彼を殺すことで2人の愛を続けようとしていたのではないかと考えたというわけだ。

しかし、その事件をそのまま映画化したのではあまりにも生々しすぎるだけで、何の問題提起にもなるはずはない。しかし、その事件をヒントとした戴思杰^{ダイ・シー・ジェ}監督の脚本とその映画は……？ 『サマリア』も良かったが、この『中国の植物学者の娘たち』も、とても50代の男性の感性とは思えないすばらしいもの……。

美しい風景が、戴思杰^{ダイ・シー・ジェ}監督の特徴

『小さな中国のお針子』でもわかるように、戴思杰^{ダイ・シー・ジェ}監督の映画の特徴は叙情的で美しい風景。『小さな中国のお針子』の舞台は鳳凰山だったが、この映画の舞台は雲南省の(?) 架空の都市昆林にある植物園。すなわち、昆林医科大学の植物学者チェン教授(リン・トンフー)が生活し、管理している、湖に浮かぶ島=植物園が舞台だ。

また、唐山大地震によって孤児となり、児童養護施設で育てられたリー・ミンが実習生として植物園に赴く中でスクリーンに映し出される川や山の風景は実に美しい。つまり、この映画の売りの1つが叙情的で美しい風景であることは、『小さな中国のお針子』と全く同じだ。

撮影はベトナムで

雲南省はもともとベトナムと国境を接する地域。ところが、この映画のスクリーン上に映る美しい風景は中国ではなく、ベトナムだと聞いてビックリ。つまり、この映画の中国国内での撮影許可が下りないため、戴思杰^{ダイ・シー・ジェ}監督はやむなくこの映画をベトナムで撮影したというわけだ。ちなみに、2006年6月14日~16日の3日間にわたって「中国電影100年」を特集した朝日新聞は、2005年12月に「中国電影誕生百周年記念大会」を開いた中国は新たに「映画管理規定」を定め、2006年6月から施行したことを報じた。このように、映画に関する規制は一層強化されているのが中国の実情のようだ。

ちなみにプレスシートによると、ベトナム政府としては、この禁断の物語はベトナムではなくあくまで中国で展開しているという判断と、さらにベトナム人のスタッフを起用することを条件として許可したとのこと。何とも微妙な判断だが、こんなところにも中国での映画製作の難しさが……。

あなたはミン派、それともアン派……？

『小さな中国のお針子』は、2人の青年に絡む小さなお針子を演じた周^{ジョウ・シュン}迅がその魅力を最大限発揮した名作だった。これに対して『中国の植物学者の娘たち』は、実習生として植物園にやってきたリー・ミンとチェン教授の娘チェン・アン（リー・シャオラン）の2人が主人公。

プレスシートによると、ミレーヌ・ジャンパノワは父親が中国人、母親がフランス人のフランス生まれの女性で、『クリムゾン・リバー 2 / 黙示録の天使たち』（04年）や『あるいは裏切りという名の犬』（04年）に出演しているとのことだが、私の印象には全く残っていないから端役……？（『シネマルーム4』347頁、『シネマルーム14』49頁参照）。中国語を話せず、また時おり灰色にも見える緑の瞳が到底中国人に見えないため、彼女自身はキャスティングに不安があったとのことだが、戴思^{ダイ・シー・ジエ}杰監督はリー・ミン役を母親がロシア人、父親が中国人と設定を変えてまで彼女に固執したとのこと。それはきっと、彼女のエキゾチックな顔立ちをどうしても活かしたいと思ったため……。そんなミレーヌ・ジャンパノワ演ずるリー・ミンは、服を着ているとそれほどとは思えないが、真正面から見せるヌードシーンにおいては、その胸の豊かさにビックリ……。

他方、厳格な父親の下で使用人のように過ごしている孤独な少女アンは、日本の女優小雪を少し小ぶりにしたような（？）中国人女優。これまではほとんどテレビドラマで活躍していたようで、私は全然知らない女優だったが、バックから見せる形のいいお尻とスレンダーな全裸のシーンは圧巻……。

そんな2人がオールヌードで抱き合うシーンの見せ方に是非注目してほしいが、2人の骨格を比べれば2人の肉体的な違いは歴然……？ いささかスケベ心が勝ちすぎているかもしれないが、そんな視点でミンとアンを見比べた場合、あなたはミン派、それともアン派……？

中国人俳優は大変

10月12日に観た『イラク—狼の谷—』（06年）はトルコがつくった反米映画で、トルコ歴代動員記録第1位を達成した映画。したがって、そんな映画に出演したアメリカ人俳優のビリー・ゼインとゲイリー・ビジーに対してはアメリカで大きなブーイン

グが起こり、マスコミからもすごい非難が浴びせられているらしい。それも、自由の国アメリカ、民主主義の国アメリカらしいのかもしれないが、さて中国では……？

同性愛という、中国ではタブーとされているテーマを扱った戴思杰^{ダイ・シージェ}監督のこの映画は、中国での上映はもちろん、中国での撮影が許可されない映画だから、そんな映画に中国人俳優が出演すること自体、政府や映画関係者から睨まれる危険がある行為であることは明らか。

フランス生まれのミレーヌ・ジャンパノワは今後中国で女優活動をする可能性は少ないだろうが、同性愛の姿を堂々のヌードシーンで演じたアン役のリー・シャオランの覚悟は相当なもの。また演劇界で活躍しているチェン教授役のリン・トンフーも、同性愛をもち込んできたミンに対して「魔物め！」と罵倒する保守的な役だが、この映画に出演するだけでかなりの勇気が必要だったはず。

さて、そこらあたりを中国の映画関係者はどのように評価するのだろうか……？

急接近する2人の心とカラダは……？

厳格なチェン教授の前でミンは失敗ばかり重ねていたが、それをやさしく包んでくれたのが、はじめて同じ年頃の女の子と接することに喜びを見出していたアン。そんな2人の仲が急速に接近していったのは当然のこと。ミンが美しいアンの裸体を目にしたのは、薬草を探りにワン先生（グエン・ヴァン・クアン）の寺を訪れた時。その日の夜、温室の中で薬草を蒸したベッドの上で裸で眠るアンを見たミンは思わず……。

この映画には、このシーンを含め美しい2人の少女のヌードシーンや同性愛のシーンが数回登場する。しかし邦画やハリウッド映画と比べるとその描写はきわめて抑制的で美しくかつ絵画的なもの。それは、戴思杰^{ダイ・シージェ}監督がこの映画は同性愛の映画ではなく、「どこにでも、いつの時代にでもある」愛の物語と語っていることから明らかだが……。

2つの名セリフをどう理解……？

事態が急転換し始めたのは、軍人であるアンの兄タン（ワン・ウェイトン）が島に戻ってきたことによって。26歳になる息子に、ミンとの結婚を薦めるチェン教授はやさしい父親の顔。そして単純にミンにホレ込んでしまったタンは、ヘタクソなラブレターをアンにチェックしてもらいながら、不器用な求婚活動を始めたが、これに対し

傷ついたまま植物園に戻ってきたが、ここからチェン教授とミン、アンの3人の生活は一変していくことに……。

そして事件が！ もし私が弁護人なら……？

前述のように、戴思杰^{ダイ・シージェ}監督がこの映画のアイデアを思いついたのは、「2人の同性愛の女性が父親の殺害容疑で死刑を宣告された」という新聞記事から。したがってここまでのストーリー展開を見れば、その後の展開にも予想がつこうというもの。この映画は推理サスペンスものではないから、そんな予想どおりの展開を見せていくが、味わいたいのは、その結末に至るまでのどうしようもなさや映像の美しさ……。

もちろん殺人事件しかも共同正犯による父親殺しの事件を「どうしようもない」と弁解することはできないが、もし私が彼女たち2人の刑事弁護人になれば、裁判官や裁判員に対してさまざまな観点から弁護活動をやりたいと思う事件だ。ところが中国の人民裁判所は、チェン教授が死ぬ直前、警官に対して「私が死ぬのは心臓病ではなく、娘と息子の嫁が患った病気、同性愛のせいだ」と告げていたことによってあつけなく(?)死刑宣告を。

映画はそんな姿を淡々と描いていく。また、ミンが児童養護施設の院長(グエン・ニュー・クイン)宛てに書いた「私とアンの遺灰を合わせ湖に撒いて下さい。そうすれば安らかに眠れます」の手紙(遺言)どおりの美しい映像で、ジ・エンド……。私としては、そんな美しい終わり方に異論はないものの、もし私がミンとアンの刑事弁護人であれば……？

2007(平成19)年10月17日記